

近世期の連歌会における女性連衆の参加形態

——荒木田麗女の場合——

雲 岡 梓

はじめに

近世期において連歌は次第に俳諧に地位を奪われ、儀式化・形骸化して行った。しかしそうした中であって、荒木田守武を生み、西山宗因との関係も深い伊勢の地では、伊勢神宮神官の娘荒木田麗女（一七三二～一八〇六）が連歌に励んでいた。麗女は『武遇麗女両吟連歌百韵』（白百合女子大学図書館蔵 090/A 642）、『麗女独吟千句』（白百合女子大学図書館蔵 090/A 643）、『鴟の草くき・竹の落葉』（白百合女子大学図書館蔵 090/A 6425）、『麗女句集』（東京都立日比谷図書館賀文庫蔵 9113-A-13）、『荒木田麗女句文』（国文学研究資料館蔵ナ 3-136, W）、『麗女連歌発句評』（朝日町歴史博物館寄託資料）等、数多くの連歌作品を著し、また参加した様々な連歌会の様子を随筆等に書き記している。

中世期においては名の聞こえた女性の連歌作者も存在したが、連歌が隆盛期に入った南北朝時代以降にはその数は減少の一途を辿り、近世期においてはほとんど姿を消している。そうした中で、多数の連歌作品を遺した麗女は特殊な存在であると言えるだろう。また、中世においては連歌論書中にも女性に関する規定が見えられ、一座への女性連

近世期の連歌会における女性連衆の参加形態

三九

衆の参加形態についても推測が可能である。しかし近世期に入ると連歌論書から女性に関する規定は姿を消し、連歌会への女性連衆の参加形態も不明なものとなって行った。そこで本稿では、まず諸先学の明らかにされたことをもとに、中世の連歌会における女性連衆の参加形態を確認する。その上で麗女の連歌資料によって近世期の女性の一座への参加形態について考察したい。

一、中世連歌会における女性

元禄六（一六九三）年刊行の『男重宝記』⁽¹⁾には、上段では松永貞徳を、下段では西山宗因を宗匠として連衆が一座を囲む図が描かれている（図1）。これが一般的な連歌会の様子と考えて良いだろう。しかし、このような連歌の一座に女性が男性連衆と同様の形式で連なることはなかった。まずは中世期における女性の連歌会への参加形態を確認しておく。

二条良基の『筑波問答』⁽²⁾には、女房連歌師の活躍する様子が記録されている。

ことさら承元二年の比かとよ、後鳥羽院、三条坊門殿とて、研ぎ磨き造らせ給ひて、詩歌管絃の御遊所にて侍りき。（略）弁内侍・少将内侍などいふ女房連歌師、御簾のうちより紅の袴・衣のつまくち押し出だして、香り満ちて、心も及ばぬ句どもを申し出だされしかば、人々感に堪へず、高声に吟詠せられき。



図1

ここには、弁内侍・少将内侍といった女房連歌師が「御簾のうちより」句を出していたことが記される。さらに弘安二（一二七九）年成立の『沙石集』⁽³⁾にも、次のような記述がみえる。

故東ノ入道、病大事ナリケレバ、年来遊ビナレタル人々呼テ、病ノ袂ニ臥ナガラ、月クマナカリケル時、最後ノ会ト思テ、連歌待リケルニ、亭主ノ発句、

アハレゲニ今イクタバカ月ヲミム

トシタリケルヲ、人々付煩ヒタリケルニ、簾中ヨリ、

タトヘバ長キ命ナリトモ

トツケタリケルニ、時ニトテ、メヅラシク、ワリナク覚ヘテ、満座感ジアヒケリ。サテ、其タバタスカリテケリ。妹ノ若狭局ゾ付テトヤラム承シ。

ここでも、若狭局という女性連歌師は連歌会に参加しながらも一座を囲まず、御簾の中に控えていたことがわかる。これらの記述から、連歌が一座を囲んで行う共同作詠形式の文芸であるにもかかわらず、中世の女房連歌師たちは、連歌会において男性と同じ座を囲まず、位置的に離れた御簾の中にいたことが看取される。そして『井蛙抄』⁽⁴⁾の記述からは、御簾の中にいる女房連歌師が句を出す際の方法を知ることができる。

同院御時、吉田泉にて御連歌ありけり。女房弁内侍、少将内侍めされて簾中に候けり。民部卿入道（※藤原為家・雲岡注）、女房の申次にて簾のきはに祇候せられけるが、耳おほろにて、瀧のひゞきにまぎれあひて、き、わかれざりける程に、御連歌もしまざりけるに、為教少将、山より柴をおりて、柴のおつる所にふさぎて侍ければ、水のをとも聞えず成にけり。

ここには吉田泉での連歌会の際に、御簾の中の女房連歌師の句を一座に取り次ぐ役割として御簾の側に控えていた藤原為家が、耳が遠かったために瀧の音にまぎれて女房の声が聞き取れなかったことが記される。この記事が女房連歌師が句を出す際の取り次ぎ役の介在を証明することは、先学の指摘するところである⁵⁾。中世の連歌会において、女性連衆は自ら句を詠み上げ、執筆に伝えることはなかった。女性連衆は一座と離れた御簾の中で句を案じ、句を出す際には御簾の側に控えていた取り次ぎ役の男性に句を示して執筆に伝えてもらったのであろう。

また、中世期の連歌論書には女性に関する特別の規定がみられる。『千金莫伝抄』⁶⁾「執筆作法」の項目には次のように記される。

貴人・児、また女などの連歌を、指合ありと言ひて返すことなかれ。かやうのこと、互ひに心ありてこそまことの執筆の感もあるべけれ。

ここでは、女性の出した句は貴人・稚児の場合と同様、指合があつた場合でも返してはならないと述べられ、連衆としての男性と女性の位置付けの本質的な相異が明確に示されている。貴人・稚児は連歌会において高貴性を帯びた存在であるとされ、それ故に式目等の枠外に置かれていた。式目違反も許容される。しかし、それは別格扱いであると同時に、一座の構成員として一人前と見做されていないことをも意味したのである⁷⁾。なお、こうして連歌論書に特に女性に関する言及が見られるからには、女性の連歌会への参加は少なくなつたのであろう。ところが、近世期に入ると連歌論書からも女性に関する言及が消える。女性の連歌会への参加が減少したため、女性連衆の扱いについて言及する必要がなくなつたものと思われる。しかし、近世においても女性の連歌作者が全く存在しなかつたわけではない。伊勢の荒木田麗女は、月次連歌会において主導的な役割を果たし、さらに連衆への指導も行つてい

た。そこで、近世期における女性連衆の連歌会への参加形態については、麗女の連歌資料を基にして跡付けて行くことが可能であろう。

二、春日大社連歌会における麗女

麗女の連歌に関する事績は、自伝や随筆等が残るため明確である。麗女は西山宗因の曾孫である西山昌林、里村昌叱の子孫である里村昌迪（里村南家）、その子昌桂、里村紹巴の子孫である里村紹甫（里村北家）に入門して連歌を学び、様々な連歌会に出席していた。里村昌逸からの宗匠の印可は辞退したものの、伊勢の豊宮崎文庫（現在の神宮文庫の前身）や連衆自宅での月次連歌会において、連衆の確保や筆紙・宴席の手配を行って主導的な役割を果たしていた⁽⁸⁾。なお、麗女の連歌活動に関するより詳細な事績については、拙稿『麗女独吟千句』研究叙説 ―荒木田麗女の連歌―⁽⁹⁾に報告している。

以下、麗女の著書の中から連歌会に関する記述を抜き出し、連歌会への参加形態について考察する。安永六（一七七七）年成立の紀行文『初午の日記』⁽¹⁰⁾には、麗女が奈良の春日大社において参加した連歌会の様子が詳細に記される。

爰には古より筑波の道に入立ちし人々ありて、今も殊にすぐれたる人々おはすよし聞きおきてしに、此家あるしも、その道にたづさひて、心ばみ給へればなん、いと興ありて覚えき。永谷宗定のぬしとて、つらね歌の道にたへ給ひ、ことさらにこのまじうし給うける、かく来つるよし聞きて、とぶらひおはしたり。（略）宗定の主は夜辺の契たがへず、待聞え給へるよし、いつしかと消息し給ひしかば、午下る頃になん、あなたに詣でたりつるに、大東延樹卿富田光知卿とて、いづれも春日のおほん神に仕うまつり給ひ、三の位にのぼり給ひにし。おのゝ此道にかしこく、ことに好い給ふればなん、渡りおはしましき。い

とはれ々しきまじらひは、おほろげにてさし出べくもなく、まいてうひ々しき心地に何事も思ひ分れぬやうなり。やがて上の句は、夫なる人聞え出給ひ、次第につらなり行く言の葉の色、とり々々にめでたう面白ければ、おのづから催されて、古めかしき口つきも、つゝみあへずかし。饗応もうるはしう、盃もたび々巡りつるほどに、鳴く一声なる夜は更過ぎつなどいふべくもあらず、事果て、まかづる空は、やう々々白みゆくやうなり。すこしまどろみつと思ゆれば、いといたう日もたけて、はしたなきまでになりぬるが浅ましう、今日はとく立ちなんとしつるを、昨夜あながちに人々のとゞめ給ふれば、しひて急ぎた、ん事もあかずおぼえて、猶休らはれたり。今日は十三日とかぞふるには、心もおどろかれて、故郷人のいかに待つらんとわりなけれど、せめてうち捨て、宗定のぬし迎の人おこせ給へるにしたがひて、延樹卿の許まうでつ。光知卿近き所にいまそかりけりときゝて、まづそなたにまうでて、やがて延樹卿の許まうでつ。今日も昨日にかはらず、歌の席のべたまひ、上の句をば人々しひて望み給ふれば、色なき言の葉聞え出などして、今日はかたみに面なれぬるやうにて、うすき隔てもとりすてつ、うらもなく聞えかはしつるは、今一しほ興まさるやうなり。まうけも心ことにし給ひ、よき酒す、めそへ給ふれば、いみじき酔にさへなりぬ。

安永六年二月から四月にかけて、夫家雅とともに近江・京・大坂・摂津・紀伊・大和を逍遙した麗女は、春日大社で大東延樹、永谷宗定、富田光知らに招かれ、四月十二日、十三日の二日間¹¹⁾にわたって連歌会に出席した。一日目には家雅が、二日目には麗女が発句を詠んでいる¹²⁾。この二日目の連歌会の描写の中に、「今日はかたみに面なれぬるやうにて、うすき隔てもとりすてつ、」との記述がある。ここからは、麗女は初対面の人々と座に連なつた初日には、他の連衆との間に「うすき隔て」を置いていたことが確認できる。「うすき隔て」とは、他の連衆との間に薄手の几帳でも立てたものであろうか。女性が男性に姿を見られることが禁忌ではなくなつた近世期においても、このような配慮がなされていることは注目に値するだろう。しかし、その隔ても互いに面慣れてきた二日目には取り払われている。また、「うすき隔て」を取り捨てて、「うらもなく聞えかはし」たとの記述からは、中世のように他の連衆と

やや離れた場所にいるのではなく、男性連衆と同席して一座を囲んでいたと読み取れる。さらにこの連歌会は夜通し続き、酒食も饗され、空が白む頃ようやく終了しているが、麗女は男性連衆とともに最後まで座に連なっている。奥田勲氏は、女性の連歌作者が減少した一因として、

たとえば連歌会の環境として、常にとは限らないし非難の対象にもなっている（「連歌会席二十五禁」など）が、連歌会が酒食を伴う場合が多かったことが指摘されている。男性主体のくだけたあるいは乱れた会に女性が加わりにくかったということが考えられる。

と述べておられる¹²⁾。しかし麗女の場合、酒宴の場に男性と同席することは連歌会参加に躊躇する要素とはならなかったようである。これは、保護者として同じく連歌を好む夫の家雅が同席しているためでもあろうか。

こうした麗女の記述を見ると、中世の女性連衆に比して位置的に男性連衆との距離が近づいていること、そして一座への参加形態は殆ど男性連衆と変わらないものになっていたことが確認できる。また、中世のように女性であるという事で枠外的な扱いを受けている様子は見受けられない。

ま と め

第一章では、中世期には名の聞こえた女性の連歌作者が存在したが、連歌会の際にそれらの女性連衆は男性連衆と同席せずに少し離れた御簾の中から取り次ぎを介して句を出していたこと、そして連歌論書においては、女性は貴人・稚児と同様に式目の枠外に置かれ、一般的な男性連衆とは異なる扱いを受けていたことを述べた。第二章では、近世期に女性連歌作者が姿を消して行った中、伊勢の荒木田麗女が意欲的に連歌に取り組んでいたことを述べた。そし

て麗女が参加した安永六年四月の春日大社における連歌会の記録に注目し、一座への参加形態を確認した。その結果、麗女は男性連衆と殆ど同様の形式で一座を囲んでいたことが判明した。その際麗女は、他の連衆と初対面の場合には間に「うすき隔て」を置いているが、互いに慣れ親しんでくると取り払っている。また、中世のように式目違反が許容される等の枠外的な扱いを受けていた様子は見受けられない。このことは、麗女が辞退はしたものの里村昌逸から宗匠の印可を受け、月次連歌会において主導的役割を果たしていることから推測できる。

以上、麗女の場合に即してではあるが、中世の女性連衆と比べて、位置的にも連衆としての扱われ方においても、男性連衆に近づいていることが確認できた。こうした参加形態が、近世期の他の女性連歌作者にも当て嵌まるものであるのか、その点については今後の課題としておきたい。

- 註(1) 近世文学書誌研究会編『第二期 近世文学資料類聚 参考文献編17』（一九八一年八月、勉誠社）に拠る。
- (2) 二条良基『筑波問答』は、応安五（一三七二）年以前成立。本文は『新編日本古典文学全集88 連歌論集 能楽論集 俳論集』（二〇〇一年九月、小学館）に拠った。
- (3) 無住『沙石集』は、弘安二（一二七九）年成立。本文は『日本古典文学大系85 沙石集』（一九六六年五月、岩波書店）に拠った。
- (4) 頓阿『井蛙抄』は、貞治三・正平一九（一三六四）年以前の成立。本文は『歌論歌学集成10』（一九九九年五月、三弥井書店）に拠った。
- (5) 鶴崎裕雄氏・田淵旬美子氏・綿拔豊昭氏・廣木一人氏「座談会」連歌を担った人びと（『文学』第一二巻第四号、二〇一一年七月）に言及される。
- (6) 『千金異伝抄』は、高津忠夫氏『高津忠夫著作集』第五卷（二〇〇四年一〇月、和泉書院）に拠った。
- (7) 前掲注(5)に言及される。

(8) 享和二年頃成立の麗女の自伝『慶徳麗女遺稿』(大川茂雄氏・南茂樹氏編『国学者伝記集成(上)』復刻版、東出版、一九七七年九月)に、「今はこの地に連歌する人なくて、宮崎文庫の会も絶えぬをなげかしうおもふ人々もあれば、いかにもして、ふた、びおこさんの願にて、人々をも導くやうなり」とあり。また、釜谷数馬宛麗女書簡(慶徳荒木田麗女遺墨)安井章吾氏所蔵、年代不明。国文学研究資料館マイクロフィルムヤブー・スライドに拠る。には「然ハ明日ハ賞花旁連歌御宿可被下旨忝候。今朝二本杉へ筆紙申遣候所、留守にて、今ニ返事ハ無御座候。乍去兼て承知之事ニ御座候故、可被出奉存候。正柯子も御承知ニ候。就夫珍敷御佳作被下忝別て面白致感賞候。則小林へ遣し可申候朴雅は幸参合候て見遣候所甚悦候て、何卒参上仕度由申候。乍去至て無拠訳御座候ニ付、明日ならでハとくと御返事も難申上との事ニ御座候。先二本杉、正柯子、私共二人、都合四人、しかと参じ可申候。昨日も申入候通、一向御構なく、酒は夕方方少シ御設被下度候。食事ハ龜末之一菜にて被成下候。呉々御造作御世話無候様頼入候。」とあり、麗女が会場、筆紙、連衆、宴席について指示していることがわかる。

(9) 拙稿「『麗女独吟千句』研究叙説―荒木田麗女の連歌―」(『連歌俳諧研究』一一三号、二〇一二年九月)
(10) 荒木田麗女『初午の日記』は、安永六(一七七七)年成立。本文は、古谷知新氏編『女流文学全集(三)』(一九一八年三月、文芸書院)に拠った。

(11) 安永八(一七七九)年以降、成立の荒木田麗女『麗女句集』(東京都立日比谷図書館加賀文庫蔵)に、「同じ卯月の比、春日の御社拜みに詣ける折、招きにしたがひ、はじめて永谷宗定の主のがり詣るとて、夏かけてとふや盛の宿の藤/同じ時夫なる人にかはりて、連歌興行の発句に、尋ね来て今日ぞ聞得し子規/同じき十三日、大東延樹卿の招きにしたがひて、昨日の同じやうなる言の葉の席につらなり侍るとて、春日野のしげりをうつす草葉哉」とあり。これに拠ると、一日目の家雅の発句も麗女が代作したものであったらしい。

(12) 奥田勲氏「中世文学における女―連歌作者に女性はなぜいないか―」(『中世文学』第四〇号、一九九五年六月)

〔付記〕本稿は平成二十五年度科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による成果の一部である。

(くもおか あずさ・関西学院大学大学院文学研究科博士課程後期課程)